

# 長野県革新懇ニュース

2018年2月号  
発行日 2月10日  
会費 2,000円  
購読料 3,000円(送料込)  
振替 0510-3-15971

225

発行 日本と信州の明日をひらく 県民懇話会  
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕  
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内  
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 成瀬政博さんインタビュー
- 2面 1面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3面 問題多い F-Powerプロジェクト  
伝統ある在来の種子を守る
- 4面 随筆「子どもたちのために」堀井正子さん  
映画評論「わたしは、ダニエル・ブレイク」  
読者のこえ・各地の動き、漢字パズル

長野県革新懇

検索



1947年大阪生まれ。大阪外国語大学朝鮮語科卒業。  
1983年画家に転身。1989年長野県に移住。  
1997年より週刊新潮の表紙絵を担当。

## 安曇野の風景に憧れて

## 松川村に移り住んだ

成瀬 政博 さん

(画家、松川村9条の会代表)

### 中原中也の口絵写真が 週刊新潮の表紙絵の原型

Q 成瀬さんは週刊新潮の表紙絵を描かれています。そのきっかけをお聞かせ下さい。

大阪からこちらに引っ越してきたのは41歳の時で、それからほぼ30年になります。その数年後に、2年ほど前に閉館になってしまった穂高の安曇野絵本館で展覧会をしたことがあるんです。その館長さんが僕の絵を気に入って下さって、展覧会に併せて画集もつくろうということで、僕が編集デザインをしたんです。編集をしながら、ふと僕の絵は週刊新潮の表紙に合うんじゃないかと思ったんですよ。ホントに思いつきなんですけど。

それからというもの本屋さ

んに行く度に週刊新潮を眺めては、いずれここに僕の絵が載るんだと、勝手に妄想していたんです(笑)。1年近くそんなことしていたんです。やがて画風も変わってきってしまったので、もう表紙の絵には合わないだろうなと表紙絵を描くという夢はいつの間にか消えていったんです。ところが、それから5年位経ってから突然、週刊新潮の編集部から表紙の絵を描いてくれと連絡があって、ビックリしました。

週刊新潮という雑誌は1956年に創刊されたんですが、出版社が週刊誌を出すのは初めての試みだったんですね。最初、谷内六郎さんが表紙絵を担当されたんです。その頃はまだ雑誌や週刊誌の数も少なかったこともあって、谷内六郎さんの絵の魅力や毎週のテレビやラジオの宣伝効果もあってよく売れたようです。谷内さんは亡くなるまで25年間描かれ、その後いろいろの変遷の末に最終的に僕が引かかったというわけです。1997年から表紙絵を描いています。

谷内さんのノスタルジックで、ちょっと不思議な哀感のある絵が週刊新潮のイメージに定着していたものですが、それを僕のスタイルで踏襲して欲しいという意向だったと思います。今、毎週のように描いている帽子をかぶったマンントの少年ですが、あのイメージは表紙絵を担当する前から描いていたもので、元々の思いつきは中原中也の詩集の口絵写真に出てくる、16歳の時の中也の写真でした。それをああいふキャラクターターにしたんです。中原中也



帽子をかぶった中原中也

### 幾多の変遷を経て 最終的に画家の道へ

Q 成瀬さんのご一家には、芸術的な雰囲気というのはいくらあったんですか。

親にはなかったと思いますけど、僕は4人兄弟の末っ子で、次男は幼い頃に伯父の養子にいき、それが有名になった横尾忠則です。長男もデザインの仕事をしていました。だから、幼い頃から二人の影響は空気のようにありました。

1969年に大学を卒業しましたが、東大の安田講堂の攻防戦がその年の1月でした。卒業して27歳位まで、今というフリーター暮らしで定職もなく、なんかいろんなことをやっていました。その頃の僕は、結婚しても子どもがいたのに、学生気分が適当にアルバイトしては、本ばかり読んでいたような生活でした。そんなとき僕の父親が裁判所の守衛をしていた関係で、親父から裁判所の廷吏を募集しているから、給料は安いけど仕事は暇だから本は読めるぞと(笑)勧められて、試験を受けたら通ったので、27歳の時に大阪の裁判所に入ったんです。別に法律に興味があったわけではなかつ

たんですが、その頃は明確な目的もなかったものですか。裁判所に入って、すぐに現代美術についての美術評論を書き、当時日本共産党が出していた「文化評論」という雑誌で文芸評論部門の募集があったので投稿し、掲載されました。それを契機にその後、原稿依頼などがきました。その頃27歳だったので自分としては30歳までに美術評論家として世に出ようかなと思っていました。

### 大きな山脈が眼前に でんとあるのが魅力

Q なぜ住まいを安曇野に変えられたのですか。また、安曇野の魅力は何でしょうか。

長野県に来る直前まで7年間ほど住んでいたのが生駒連峰のすそ野にある交野市というところでした。絵を描きだしてから家の近くにアトリエを借りていましたが、女房も絵を描いているので2人で使いたしたら手狭になり、広い場所がほしいなと思っていました。たまたま知り合っていた絵描きさん夫婦が我が家に来て話していたら、彼はスペインですと絵を描いていて、日本に帰ってきて安曇野で新婚生活を始めたらしいのです。奥さんが「あの頃は毎朝窓を開けるのが楽しみだったわ」と言っていて、その言葉で自分がその風景を見ているような気になって、そういうところに引越したいなと思いついた。不動産屋さんに相談したところ「借金しなくても今の家を売ったら十分引越してきませんか」と言われビックリしました。世情に疎いものだから、当時のパブルのことを知らなかったんですね。

安曇野の魅力ですが、目の前に北アルプスの大きな山脈

【2面に続く】